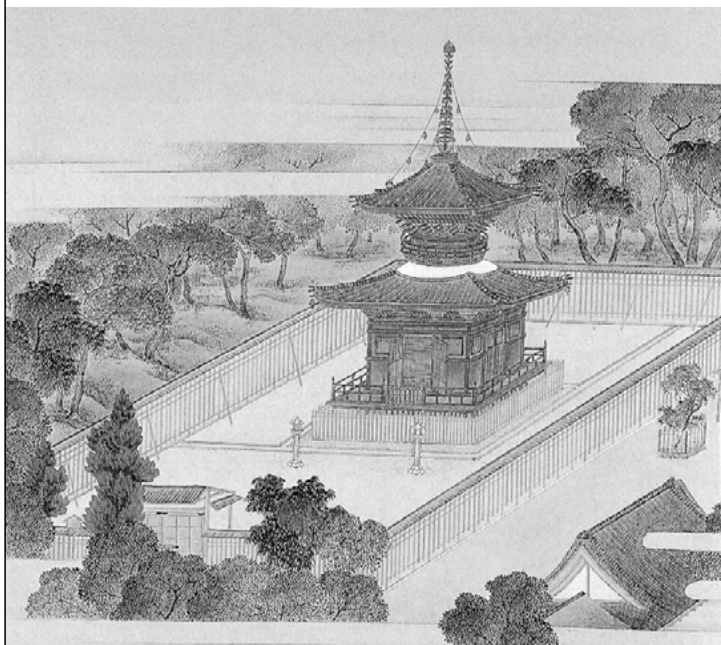


鴨東通信

夏

2010.7 No.78



●シリーズ古都の近代〈最終回〉
近代古都の公文書保存と公開
伊從 勉

●てーたいむ
一〇〇〇年先を見すえて
田良島 哲

●エッセイ
京都の天皇陵と私
淡窓・旭荘兄弟の文章論
山田 邦和
井上 敏幸

●リレー連載 世界のなかの日本研究3
回り道から得たもの
趙 怡

●史料探訪
「憲法発布祭典双六」
佐藤健太郎

歴史のなかで陵墓をみていくと、

そこには現在では思いもよらない姿があった――

高木博志（京都大学准教授）

山田邦和（同志社女子大学教授）

編 〔8月刊行予定〕

歴史のなかの

天皇陵

▼A5判・三〇〇頁／定価二、六二五円

天皇・皇族の墓である陵墓は、現在宮内庁の管理下にあり、一般の立ち入りが厳しく禁じられている。そのため、文化財としての陵墓の調査・研究は進んでいなかったが、近年になって、学界の要請をうけて神功皇后陵（五社神古墳）が研究者に限定公開され、仁徳天皇陵（大山古墳）が世界遺産暫定リストに登録されるなど、社会的にも大きな関心を集めている。

各時代に陵墓がどうあり、社会の中でどのように変遷してきたのか、考古・古代・中世・近世・近代における陵墓の歴史をやさしく説く。京都アスニーで行われた公開講演に加え、研究者・ジャーナリストによるコラムや、執筆者による座談会を収録。

〔目次〕

総論 古代・中世の陵墓問題	山田邦和
総論 近世・近代の陵墓問題	高木博志
天皇陵と古墳研究	菱田哲郎
奈良平安時代における天皇陵古墳	北 康宏
律令国家の陵墓認識	
平安時代の天皇陵	山田邦和
江戸時代の天皇陵	上田長生
幕末期の陵墓修復と地域社会	
天皇陵の近代	高木博志

●コラム●

「天皇陵」における前方後円墳の終焉	（高橋照彦）
平安京・京都近郊の陵墓と古墳	（山本雅和）
藤原氏の陵墓―葬法と寺院と―	（堀 裕）
仏塔に埋葬された上皇	（上島 享）
天皇の怨霊とその祭祀	（山田雄司）
中世の天皇の死	（河内将芳）
綏靖天皇陵前東側所在の石燈籠について	
江戸時代の大仙陵（伝仁徳天皇陵）と周辺住民	（福尾正彦）
小中村清矩文書・門脇重綾文書の	（鍛冶宏介）
皇霊祭祀関係資料	
近代古墳保存行政と陵墓	（武田秀章）
宮内庁による陵墓管理の根拠	（尾谷雅比古）
世界遺産と君主側・王領	（外池 昇）
百舌鳥・古市古墳群、世界遺産暫定リストに記載	
（今井邦彦）	

◎座談会◎

歴史のなかの天皇陵

上田長生・北康宏・高木博志・菱田哲郎・山田邦和（50音順）



『文久山陵図』

神武天皇畝傍山東北陵



後月輪陵（泉涌寺内）

近代古都の

公文書保存と公開

伊 從 勉



「京都市区改正設計図」表紙(右肩に「秘の朱印」)

市電の走っていた京都外周街路設計図。一九一九年二月二五日、内務省開催の京都市区改正委員会議事の付図だが、京都府・京都市の所蔵は確認できない。

最近、沖繩の施政権返還時の日米密約に関して、政府の外交文書保存の実態が露呈した。では、古文書も多い歴史都市では、公文書保存はどうなっているだろうか。文書保存と管理の能力も歴史都市の格を構成する。

都市改造の図面記録を例にとると、驚くほど公的機関にはみあたらない。たとえば京都の明治以来の都市改造に用いられた図面類である。ところが古書市などでは、時として、委員会(審議会)委員旧蔵の図面や資料が、まとまって出回ることがある。今でも思い出すが、京都市電の全路線の詳細図面一式が、市電廃止後のあるとき、古書店のカatalogに法外な高値で載ったことがある。また、筆者が古書店から購入した敗戦直後の特別都市計画法による東京都の用途地域図面一式は、某公立図書館所蔵印が捺されている。かように、なぜ、公文書は人知れず捨て

られるのであろうか。

米国流の厳密な公文書管理を、最近の報道で日本人は耳にするが、実は近い過去に、それを経験していたはずなのだ。五二年までの連合国の日本占領期にGHQとの交渉でそれを実見した公務員は少なからずいた。二七年間米軍が占領した沖繩では、軍政府の文書管理方法が琉球政府(行政府)に伝わり、七二年までの米国民政府と琉球政府の往復文書を含めた行政資料が沖繩県公文書館にまとまって所蔵され重要な公文書資産となっている。地方行政府が公文書資産を形成した例はある。東京都、京都府、そして前記沖繩県などが参考になる。公文書館(京都府は総合資料館)が、いずれも、学者出身の知事(東京都は美濃部知事、京都府は蜷川知事、沖繩県は大田知事)の在任時に創設されているのは、何を物語るであろうか。

(いより・つとむ 京都大学大学院教授)

■古典籍公開の難しさ

―東京国立博物館の所蔵する古典籍を、影印・翻刻・解説で紹介する、東京国立博物館古典籍叢刊を、この9月に刊行します。現在、第一回配本『九条家本延喜式』の編集作業を鋭意進めていただいております。

博物館の一番基本的な役割は、ものそのものを展示し、公開することです。東京国立博物館（以下「東博」）は一八七二年に創設されて、再来年で一四〇年になりますが、その間ずっと、ごく一部の期間をのぞいて展示を行ってきいています。特に特別展のような大きな規模の展覧会は、社会的なインパクトも強い。だから、博物館といえは行つて展示を見るところ、ということにどうしてもなるわけです。

ただ、博物館というのは、広い意味での知的な資産をストックする場所でもあります。東博には膨大なストックが蓄積されていますが、そういう普段は展示されないようなものの情報を出していくということも、博物館の大きな役割です。

また、今回の古典籍叢刊に収録するような古

ていーたいむ

1000 年先を見すえて

た ら し ま さ と し
田良島 哲

(東京国立博物館書跡・歴史室長)

典籍は、その全貌を公開することが難しいものです。展示室に出しておくだけでは見せ方としては不完全です。展示ケースの中の古典籍のページをめくるわけにはいきませんしね。そういう、通常の展示では足りないところをどうやったらいいのかというのが大きな課題になってきました。東博は、まだ十分その部分はできてこなかったというのが正直なところだと私は考えています。

一般的な意味での情報の公開、たとえば大きな写真の載った図録を出す、研究報告書を出す、ということなどはずっとやってきていました。ただしそれらは美術品や美術としての書跡を公開するということでした。それらが一巡してようやく、古典籍は一ページ公開しても意味がない、全部出すところに意味があるのだということが、理解されるようになってきたのです。

しかし、それを東博だけで出版しようとする大変なことです。今回、思文閣出版の出版文化に対する思いと、東博側の、古典籍を完全な形で広く公開したいという思いがうまくマッチして、出版にいたりました。

■独立行政法人化と事業仕分け

こういう民間企業との協業ができるようになったのは、二〇〇一年に独立行政法人になって経営形態が変わったからです。役所ではなくて一種の企業体になったのです。経営の自由度はあがって、それ相応の成果は出てきています。特徴的なのは、大日本印刷と組んだTNMイメージアーカイブという事業です。東博の所蔵品の画像データを、有償で希望者に提供するものです。以前は書籍・雑誌などに東博所蔵品の画像を使用したいという申請を、館で受け付けて許可を出し、フィルムを貸し出して、と役所的に行っていました。効果がわりに手間がかかりました。思い切って制約を取り払い、大日本印刷の子会社であるDNPアートコミュニケーションズと連携することで、比較的短い期間でデータや写真を提供できるようにしたのです。

独立行政法人化して、柔軟な経営ができるようになったのですが、そうやって稼いだ分、国からの交付金は減らされます。剰余金は国に返納しないといけないし、賽の河原の石積みのような状況になっているのも確かです。

また、組織的に弱体化した部分もあります。今日お話をしているこの建物は、資料館といって一九八四年に開館しました。和・漢・洋図書約二〇万冊を所蔵しています。開館当時は一〇人以上専任の研究員がいたのですが、その後、教育や情報というようないろいろな仕事が出てくる中で、歴史資料や書跡を管理して提供

するという仕事に対する人員が割けなくなっていました。困ったことにこの四月からは、専任の研究員がついに誰もいなくなってしまったのです。みんな何か別の仕事があつてこの仕事もやっているという立場です。そういう意味では以前に比べると弱体化です。その分、ネットでのサービスを拡充していつているという面はあるのですが。

―先日、独立行政法人国立美術館・同国立文化財機構・同国立科学博物館の事業に対する政府の事業仕分けがあり、ネット中継を固唾をのんで見守りました。国費は投入しないが事業は「拡充」という結果で、少し安堵はしましたが、この先は難しいですね。

仕分け対象の他の法人の多くは、国費の投入を減らし、仕事をできるだけ減らせという方向ですが、博物館・美術館はそうではなくて、仕事をもっとやってもらわなければいけないんだ、という話がありました。そこから先はまだ何も解決していないのですが、そのためには、今の独立行政法人という形態では限界があるので、法人のあり方を検討しなさい、というのが結論としてでているのです。今までは、うちはお金が必要なんですといつても、おたくは独立行政法人なんだから、経費や人を減らしなさい、ということになっていたのですが、それでは法人のあり方を何とかしなさいということになったのが、この前の仕分けの一つの結論です。政府系法人のあり方の方の見直しが進んでいますので、いろいろ可能性は考えられます。

■「九条家本延喜式」の価値

― 古典籍叢刊の最初に、「九条家本延喜式」が選ばれた理由は何でしょうか。

東博が現在所有している古典籍は、古いものは多くが国宝・重要文化財に指定されています。端的に言えば、「九条家本延喜式」は、そのなかでもっとも貴重なものの一つです。そして、人文・社会系のさまざまな分野の研究の材料になる、非常に幅の広い史料なのです。

「延喜式」とは、平安時代中期の法令をまとめたもので、律令国家が発生してから、法制度の形を変えながら国家経営をしてきた、その集大成ともいえる記録であり、古代・中世の根本史料です。当然、歴史の研究には必須ですし、有名なところでは、神社の研究において、その神社が延喜式に記載されているかどうか、つまり「式内社」であるかどうかというのが大きな問題になります。日本語の歴史にも欠かせません。

「延喜式」は本来全五〇巻ですが、東博所蔵の「九条家本」はそのうち二八巻を伝えています。平安から鎌倉時代の書写とみられる古写本であることと、五撰家である九条家に伝来したという由緒などから、数ある『延喜式』写本のなかでも最も重要な写本とされています。



特筆すべきは、その紙背（延喜式が記述されている紙の裏面）で、一〇世紀から一一世紀はじめを中心とした文書が伝えられています。当時は紙が貴重なもので、不要になった文書を継ぎ足して、その裏に「延喜式」を書写したために、裏面に史料が遺されたのです。紙背文書は、「延喜式」のような公式の法令ではわからない、平安時代の文字通り社会の裏みなどところをよく伝える史料です。また仮名消息（書状）もあり、美術・書道史上においても優れた史料です。非常に多面的な学術的研究が期待でき、なおかつこれまで十分な情報がオープンにされてこなかったということで、古典籍叢刊の冒頭を飾るのにふさわしいと考えました。

― 現在でも、東博のwebサイトで全巻の画像が公開されています。情報公開としてはそれだけでは不十分ということでしょうか。

生の画像をぼんと出しても、受けとる側でしっかり対応していただけるだろうというものもあります。たとえば、江戸時代の和書などは、書誌とある程度きれいな画像さえ揃っていれば、読みとる側はかなりのことができます。しかし「九条家本延喜式」くらしいレベルの古典籍になると、それだけでは済みません。本当にさまざまな情報が含まれてきます。いくら写真がきれいであっても直接原本を見るのとはやはり違います。原本から得られる情

報をきちんと整理して提供するというのは博物館としての義務だと思います。

東京国立博物館古典籍叢刊は、学芸研究部長である島谷弘幸を編集委員長とし、館内では高橋裕次、富坂賢、私が編集委員を務めます。また東京大学史料編纂所の田島公先生、吉岡眞之先生、同大学院人文社会系研究科の月本雅幸先生にも編集委員に入っていただき、原本調査の上、最終巻に解説を付していただきます。

また、田島公先生が研究代表を務める、科学研究費補助金学術創成研究費「目録学の構築と古典学の再生」とも密接に連携しながら調査・研究を進めています。現在は「九条家本延喜式」の最終巻に収録する紙背文書の翻刻原稿の読みあわせと、原本調査を重ねているところです。

■電子書籍と紙の本

——インターネットがこれほど発達し、膨大な情報が瞬時に手に入るようになりました。紙の本がなくなると言われている時代に、史料を写真版で刊行することの意義はどこにあるのでしょうか。

本と比べてみた場合に、現状のコンピュータはあまり使い勝手のいいデバイスではないのです。たとえば電源を立ち上げなければいけない、ソフトウェアが動いていないといけない、データそのものは人間の目では見られないなど、実はさまざまなハードルをクリアして初めて、一枚の写真を見ることができるようになるのです。本をばかっと開くのには比べると、大変な手間なわけですね。

インターネットフェイスとしてはまだまだです。今、キンドルとかアイパッドとかいうような、本に変わるようなデバイスが出てきています。おそらく、かなりの影響を及ぼすだろうとは思いますが、やはりそれらにしても、いろんなシステム要件を満たして初めて成り立つものですね。

また、根本的なところでは、電子情報の継続性、いつまでそれがネットワーク上にあるのだろうか、ということは常に問題になるわけです。昨年はあったウェブサイトが今年はないとか、アドレスが変わったというようなこともある。そういう意味では物理的な存在に対する信頼感はまだまだ厚いのです。

私は電子書籍には期待しています。便利ですし、情報の公開という点で役に立つというのもまた事実です。だからといって、めくる本がなくなるとは思えません。古典籍叢刊のような、物理的に残しておくことが重要だという分野には残るでしょう。読み捨てられるようなものは、本としてはなくなるかもしれません。一〇〇円払っていらなければそれで申し訳ない、というようにならないでしょう。本を作成するのに今より手間ひまやコストがよけいにかかり、紙の本を読むのは贅沢だという時代が来るかもしれません。延喜式は、現在まで一〇〇〇年伝わりました。もう一〇〇〇年、現物のかわりに、となった場合に今はまだ電子データではありません。本の方が信頼性が高いのです。

(二〇一〇年五月二日 於…東京国立博物館)

京都の天皇陵と私

京都に暮らしていると、町のあちこちで天皇やその他の皇族の陵墓に出会う。もちろん奈良や大阪のような巨大な古墳は少ないが、それでも丁寧にみていくならばひとつひとつの陵墓がそれぞれの個性を発揮しており、興味はつきない。

子供の時、御所の横を自転車であつていた私は、「紫式部邸宅跡」という看板を掲げた廬山寺というお寺を見つけた。源氏物語の作者がこんなところに住んでいたことに感動したが、もうひとつ興味を持ったのは、その門のところに「慶光天皇廬山寺陵」と刻まれた碑が立っていたことである。お寺に入ってみると、墓地の一角にたくさん石塔が立ち並んでいる区画があり、これが慶光天皇の御陵だった。しかし、慶光天皇とはいったい誰なんだろうか？ 子供だった私にとって、これは聞いたことのない天皇の名前だったし、家に帰って百科事典の歴代天皇一覧表を紐解いてみても、そんな人物はでてこなかった。

意地になって百科事典のページをひっくりかえしてみても、慶光天皇とは江戸時代後期の光格天皇の父である閑院宮典仁親王のことであることがわかった。光格天皇は、先代の後桃園天皇

山田邦和

が皇子がないままに崩御したため、急遽即位したのであった。ところがここで大きな事件がおこる。天皇は実父の典仁親王に対して太上天皇の尊号を贈ることを願ったが、江戸幕府によって拒否されたのである。江戸時代の幕府と朝廷との間を震撼させた「尊号一件」がこれである。こうして典仁親王は生前には太上天皇になれずに終わったのであるが、後に明治天皇が高祖父にあたる典仁親王に対し、改めて太上天皇の尊号と慶光天皇の諡号を奉ったのである。私はこれによって、歴史上には即位していないにもかかわらず「天皇」の称号を持つ追尊天皇という人物がいたことを学んだのである。

中学生の時、平安神宮にお詣りして、拝殿の東側の蒼龍楼の陰に隠れて「天王塚陵墓参考地」（西天王塚）という塚があることを見つけた。長辺七・五メートル、短辺五・五メートルの小さな長方形の区画にわずかな盛り土があり、大きな木が根を張っている。図書館に行つて調べてみると、後三条天皇の陵または火葬塚、鳥羽天皇皇后藤原得子（美福門院）の建てた歓喜光院にあった西天王社の跡など、諸説紛々であると書いてあった。私はここで

初めて、陵墓の中には、正体が必ずしもはっきりしない陵墓参考地という奇妙な存在が含まれていることを知ったのである。さらに、こうした小規模な塚を見てみると、現在は鳥居や参道を備えた立派な天皇陵であっても、整備される以前の江戸時代にはこのようなささやかなものにすぎなかったのではないかと考えることができた。このように少年の頃から陵墓に接してきたことが、結局は私の歩む道を決定づけたのだと思う。私にとって、陵墓はまたとない歴史学・考古学の教科書だったのである。

歴史学・考古学を専門とすることになってからも、少年時代の天皇陵への関心はそのまま継続した。私も考古学者のはしくれとして、多くの研究者がとりあげる古墳時代の巨大古墳にも関心を持っていくけれども、それ以上に興味を引かれたのは子供の頃から親しんできた京都の天皇陵だった。そこで、京都のものを中心として多くの陵墓の個別研究にとりくんだ。中でも、桓武天皇陵が桃山丘陵の頂上部にあったという仮説を立てたり、三十三間堂に向かい合って後白河天皇陵とその妃の建春門院平滋子陵けんしゅんもんいんたいのしげこが並んでいたと推定したことは、それまであまり顧みられなかった分野に光を当てたものだと思う。そして、奈良・平安時代の陵制史が、自然の丘陵を利用した山丘型陵墓、山陵の存在そのものを否定する薄葬、陵墓とその附属寺院（陵寺）のセット、陵墓そのものが仏堂となる堂塔式陵墓、という諸段階をたどったことを解明することができた。豊臣秀吉の伏見城の復元研究にもたずさわったが、これは伏見城の遺跡が明治天皇陵・昭憲皇太后陵の陵

域内に隠されているため、私にとっては陵墓研究の一環という意味を持っていた。私の研究は、古墳だけではなくその後の陵墓の持つ意義を解明しようという問題意識に貫かれているが、これは私が子供の頃から京都の天皇陵に親しんできたという経験あつてのことだと思う。

しかし研究を進めれば進めるほど大きな壁を感じるのは、陵墓が宮内庁の徹底的な管理下にあり、一般の立ち入りが厳しく禁じられていることである。そこで陵墓問題に関心を持つ歴史学・考古学の一六の学会・協会は協同して、宮内庁に対して天皇陵の公開を求める運動をくりひろげており、私も財団法人古代学協会や一般社団法人日本考古学協会の立場からこの運動に加わっている。最近ではその成果が窺って宮内庁当局の理解も進み、限定的ではあるにせよ重い扉が開きつつある。昨年には桃山陵墓地の伏見城跡に短時間ではあったが立ち入りが許され、謎に包まれていた伏見城の遺跡の実態に迫ることができた。そこで実感したのは、やはり専門の研究者が遺跡を実地に踏むことによつて大きな成果が挙げられるという当然の事実である。今後とも私たちは、研究や運動を通じて陵墓と私たちを隔てている厚いヴェールを少しずつ開いていきたいと思っている。

（同志社女子大学教授）

淡窓・旭莊兄弟の文章論

井上敏幸

廣瀬淡窓・旭莊兄弟が、儒者として、また詩人として広く知られていることは、ここに改めていうまでもないが、いま兄弟の文章論に注目し、二人の著作物について少しく考えてみることにする。

兄弟の文章論は、淡窓の『迂言』^{うげん}の中で確認できる。淡窓は、学校には、経学以下一三科目が必要で、その中に「文章学」を置く必要があるとする。学習の仕方は、素読、輪読、輪講と進み、その上で「文章」に入る。文章は、漢文はむずかしいので、普通の学生は俗文（日本漢文）を学べばよいが、学問を職分とする者、また師範役の者は、「終身ヲ抛テ、其精微ニ入ルコト」^{その}が要請される。というのも、文章には、「人ノ見識ノ高下、才智ノ長短、残ル所ナク其内ニ見ワル、者」^{あら}で、「文ノ試ヲ数々スレバ、其人ノ才不才ハ、鏡ヲ以テ照スヨリモ明」^{あきら}になるからである。と文章の重要性を明かにした上で、「漢文・和文ノ差別ハナシ」と言い、さらに、「德行・言語・政事・文学ハ孔門之四科ニシテ、成徳ノ人ヲ称スル語」だと述べ、儒者にとつての文章の重要性を、「文章ニテ義理ヲ判断シ、事体ヲ処置スルコト」^{いちじょう}々宜シキヲ得タルハ、政事ノ才

アリテ、文学ヲ兼タルナリ」と説いている。

この「孔門之四科」について伊藤仁斎は、『論語古義』において、「德行ハ聖学ノ全体、言語・政事・文学ノ三者ヲ兼ス。（中略）而テ三者マタ德行ニ本カザレバ、（中略）以テ学ト為ニ足ザルナリ」と述べ、三者はともに「德行」にもとづくものでなければならぬといっている。これに従えば、淡窓は、「文章ニテ義理ヲ判断シ、一々宜シキヲ得タル」は「文学」、「事体ヲ処置スルコト一々宜シキヲ得タル」は、「政事」と称することができる。しかし、この「文学」と「政事」を「兼タル」ものは、「文章」にはかならない。「文章」とは、まさに「孔門之四科」の根本だと主張していたのである。また、淡窓は『迂言』の中で「記録」の重要性を説き、「記録ノ文ハ、漢文ニテモ、又和文ニテモ苦シカラズ。タダ文章能行届キテ、事情如シ見ニ写シ得ルヲ主トスベシ」と論じていることも注目されるのである。

ところで、大野雅之は、旭莊は六・七歳頃に淡窓と同居しており、淡窓より「多少の業を受けていた」こと、また淡窓塾への正式の入門が九歳の折であったこと、さらに淡窓より『小学』の講

義を受け持つことを許されたのが、一二歳だったことを考証している(大野雅之「広瀬旭莊と咸宜園——離郷決意の萌芽をさぐる——」『史料館研究紀要』四号、大分県立先哲史料館、一九九九年三月)。この旭莊の経歴を「文章学」の課程に当てはめてみれば、六・七歳で素読に入り、輪読・輪講を経て、少なくとも一二歳までは、「文章」に進んでいたことになる。旭莊は、師範役の者は「終身ヲ抛テ其精微ニ入ル」ことが求められるという淡窓の教えに従って、「孔門之四科」を学ぶことに専念したのであろう。文章においては「義理ヲ判断シ、事体ヲ処置スルコト」に「宜シキヲ得ル」ための学習に励み、なかんずく「德行二本ヅ」く「義理ノ判断」「事体ノ処置」を身につけることに勤めたと考えられる。

この「事体ノ処置」のための文章は、「記録文」に等しいのであるが、旭莊は『九桂草堂隨筆』の中で、自分の『日間瑣事備忘』を例に出して、この日録の文章は「兼て叙事の文を習ふ為に、漢文を用て、写し難きの事を写し」たものだとして述べており、淡窓のいう「記録文」と旭莊の「叙事文」とが同義であることが知られる。また、「義理」を主とする文章について、旭莊は、やはり『九桂草堂隨筆』の中で、この書は「往事を追録し、虚霊を主とする故、議論多し」と述べており、「議論文」という認識があったことがわかる。

この認識は、淡窓も同じであった。旭莊の漢文隨筆『塗説』の跋文において、淡窓は、日本の儒者の多くは、「古文」を尊んで、隨筆類を済閑の具として下に見ているが、この隨筆は「多ク理義

ヲ談ジ」ており、「古文ノ気格」が感じられると評し、「議論文」の重要性を認めていたのである。

以上、二人が共有した文章論でもって、二人の著作物を見てみると、淡窓の場合、『約言』『析玄』『義府』の三著は、学説思想の検討を重ねた「議論文」そのものであり、それらの背後には、「孔門之四科」の「德行」があつて、淡窓独自の思想の展開がなされていることが理解されよう。

旭莊の場合、その主著は『日間瑣事備忘』一六六巻だといつてもよいであろう。この三〇年に及ぶ日録は「叙事文」そのものであるが、門人亀谷省軒は「旭莊廣瀬先生伝」の中で、旭莊が常々「吾一生ノ精神、日録ニ存ス」といつていたと記している。

この「精神」が「孔門之四科」の「德行」であることはいうまでもないが、旭莊は、『九桂草堂隨筆』の中で、たびたび文章・訓詁の学の弊害を除く良薬は、『論語』の「学ンデ思ハザレバ罔シ」であると書いている。すなわち、「思ふこと」とは「無字の書を読むことだ」ということに気付き、これこそが自分が日々勤めなければならぬ「德行」だと認識していたのである。淡窓とはまた別種の大詩人として、あの膨大な詩・古文の創作が可能であったのも、この「思ふこと」の実践と深さがあつたからだったといえよう。

(佐賀大学名誉教授・佐賀大学地域学歴史文化研究センター特命教授)

回り道から得たもの

ちよう
趙

い
怡

日本にきたのは一九八九年六月一日、あの天安門事件の直後だった。そもそも大学ではフランス文学を学んでおり、日本語はもちろん、日本文学に関する知識もゼロに等しかった。東京大学大学院で比較文学を専門にし、研究テーマを中国における西洋文学の翻訳紹介や、清末の外交使節における西洋体験にしたのも、日本文学を避けて通りたかったのが大きな理由だった。博士課程に入ってから、研究から遠ざかり、いや、むしろ研究への道を半ば断念した時期もあった。資料の不足や、出産育児・家の事情など、言い訳はいくつも挙げられるが、いま思えば、日本語で論文を書く力が十分でなかったことが最大のネックだった。

そんななかの二〇〇二年暮れ、大学院時代の恩師川本皓嗣先生から、『著書『日本詩歌の伝統 七と五の詩学』第三章「七と五の韻律論」の中国語訳を頼まれた。何も考えずに引き受けたものの、和歌や俳句の韻律はおろか、引用された多くの作品の出処や意味すら分からなかった。一つ一つ調べるのはあまりに時間がかかるので、まとめて教えてもらおうと先生に頼んだら、快く応じてくださった。ご自宅で二時間をかけて一つ一つの作品を丁寧に

解説してくださった先生は、内心私の無知にあきれて、翻訳者の人選を間違ったと後悔されたのではないか。しかし私はこの翻訳を通じて和歌俳句の基礎を一から学び直す機会を得、和歌俳句の中国語訳への楽しいチャレンジも体験できた。この仕事をきつかけに、たて続けに数冊の学術書の翻訳に携わった。翻訳を通して、一流の比較文学研究をじっくりと読みこみ、日本語の表現法や論文の書き方を学ぶこともできた。そのうえ様々な研究のヒントを得て、研究への意欲も徐々に再燃した。

二〇〇五年春、北京大学の孟華教授から、夏に開かれる中国比較文学会第八回全国大会の中の「近代中国・日本・西洋文化における相互影響」と題するセッションになにか発表しないかという誘いのメールが来た。ちょうど詩人金子光晴の自伝作『どくろ杯』や『ねむれ巴里』を読み、その「放浪の旅」に興味を抱いた頃であり、セクシヨンの趣旨にも合う「金子光晴における上海とパリ」をテーマに発表することにした。最初はやや安易な「比較文学的」なテーマだったが、調査を進めるにつれ、予想外の広がりを見せてくれた。いわゆる「放浪の旅」の同行者でありながら、

いまでは単なる「不貞な妻」としてしか知られていない森三千代の存在。帰国後に高名な女流作家として活躍していた彼女が書き残した数多くの紀行詩、自伝作、そして小説の発見。光晴の自伝作の下地の一部にもなっていたこれらの作品は、従来光晴のみによって語られてきた世界に多くの新しい要素をつけ加えた。夫と妻の異なる目線だけでなく、二人の詩、エッセイ、小説、散文詩、そして絵画などの多様な手法。これらすべてを駆使しながら描いた放浪生活の日々、現地にいる日本人居留民の面々、上海またパリの都市風景が、どんどん多彩に、立体的になってくる。

そして何より驚かされたのは、彼らと中国との関わりの深さである。魯迅・田漢・郁達夫・陳抱一・白薇などの、中国近代史に名を残した人々との間に結んだ友情の絆は、金子夫婦の中国観ないし彼らの人生に大きな影響を与えた。多くの日本文学者が従軍し、または「銃後」で侵略戦争を擁護するなかで、沈黙さらに抵抗への道を選んだ勇氣。戦争も断ち切れない三千代と中国の現役軍人鈕先銘との恋と友情。そして多くの人が中国の文化大革命に酔いしれたときの、晩年の光晴の醒めた目と批判。知識人として、時勢に左右されず、物事を見極める知性と「一億二心」を抱く勇氣が、こと日中両国においてはいかに得難いことかを熟知しただけに、胸を打たれたことも多かった。さらに視線を周辺へと広げていくと、金子夫婦を取り巻く様々な人間ドラマが、これまた日中両国の交流（衝突）史の縮図のように見えてきて、興味は尽きない。

「金子光晴・森三千代と中国」を追っていくなか、ご遺族の方々を始め、金子光晴の伝記作家や研究者、日中両国の上海史研究者など、多くの方々との出会いの輪も広がり、彼らに助けられたことが数知れない。折しもかの「反日デモ」が喧騒された年に始まったこの研究は、近くて遠い、愛憎交わる日中両国間の関係、こと両国の文化人がお互いに抱いていた、一言では言いきれない複雑な感情を、ある意味皮膚感覚的に考えさせ、理解させる契機を作ってくれた。こうしてミツハル・ミチヨワールドの深さ、広さに魅了されつつ、時には迷子になりながら前に進めていく体験は、この「研究」の醍醐味である。かつて途中で放り出した中国における西洋文学の翻訳紹介や、清末の外交使節における西洋体験に関する考察も、日中比較文学のみでは得難い、より広い視野を与えてくれている。相変わらず日本語を操る自由を手に入れないものの、苦しみながら書くこと自体が、これまで経験してきたすべての喜怒哀楽と同様に、自分の研究、否、自分の人生そのものに多くの栄養分を与えてくれるだろうと信じている。

足が遅く、不器用でありながらもあちこち道草を食い、随分と遠回りをしてきた。なかなか山頂が見えてこないのが心細いときもある。しかしまっすぐの一本道に沿って、一気に登頂する場合では決して見られない風景を満喫できたのも、回り道ゆえの得であらう。

（東京工業大学非常勤講師）

史料

探訪

(41)

「憲法発布祭典双六」

佐藤健太郎

(東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター 助教)

近代日本法政史料センター・明治新聞雑誌文庫(通称、明治文庫)が有するコレクションの一つに、「吉野文庫」がある。明治文庫の創設に深い関わりを持つ、吉野作造博士の蔵書を保管し、今に伝えるものである。

吉野作造は、一般には「民本主義」を唱えた実践的な政治学者として知られており、今日でもなお、「大正デモクラシー」という概念の象徴的存在として扱われている。しかしまた、吉野には、明治文化研究者としての顔もある。吉野を明治文化研究に駆り立てたそもそもの動機は、憲法制定当時の明治の世相と大正のそれを「時勢の変化」という面で対比し、大正期における「デモクラシー」の必然性を立証するためであった。

吉野は、関東大震災による蔵書の焼失を経ながらも、明治文化に関する資料文献の蒐集に励み、大正一三年(一九二四)には、宮武外骨らとともに、明治文化研究会を組織する。そして機関誌『新旧時代』で精力的な執筆を行うと同時に、資料蒐集への協力を広く世間に呼びかけていた。そこに、博報堂創業者瀬木博尚(せきひろなお)が一五万円の寄附を申し出る。この寄附金と宮武外骨の旧蔵書・吉

野所蔵の新聞雑誌類を中核として、昭和二年(一九二七)明治文庫が発足したのであった。

吉野はその後も資料の蒐集に励み、集積された資料は、『明治文化全集』(全二四巻、日本評論社、一九二七―三〇年)刊行の際にも活用されている。その資料を吉野没後に収蔵したのが、吉野文庫である。吉野文庫には、和書で八千冊を超える文献が残っているが、その多くは幕末維新期から憲法制定期に集中している(これらの点については、三谷太一郎「吉野作造の明治文化研究」『国家学会雑誌』一九七〇年五月)に詳しい)。

さて今回紹介したいのは、その吉野文庫の中にひっそりと残されている、一枚の錦絵双六、「憲法発布祭典双六」(吉野文庫の目録表記では「憲法発布双六」)である。明治憲法制定史研究は、吉野の明治文化研究の中でも重要な位置を占めるものである。吉野の関心は広い範囲にまで及び、「帝国憲法の俗解」(『新旧時代』一九二六年五月)では、明治憲法が当時の世俗にどのように受け止められていたかを検証したが、この双六も、そういった吉野の関心に連なるものとして位置づけることができるだろう。しかしそ



「憲法發布祭典双六」

(明治新聞雑誌文庫所蔵、野久保雅嗣撮影)

れにしてもこの双六は、吉野の旧蔵資料のなかでも変わり種である。また、憲法發布式典という点に注目すれば、それを描いた錦絵は数多あるものの、双六となれば珍しい部類に入るだろう。以下、この双六の持つ面白さと美しさを解説していきたい。

「憲法發布祭典双六」は全「四マスの飛び双六」である。「ふりだし」は、憲法發布式の絵図であり、明治天皇が黒田清隆首相に、憲法原本を手交するその瞬間を描いたものである。そして「上り」（皇城御出門）は、發布式の翌日に行われた東京市奉祝典に臨幸する、天皇一行の姿を描いたものであり、二重橋の向こうに富士山がそびえ立つ絵図である。その他の「一二マス」は、全て奉祝

典当日における、東京市内の様子を描いたものである。作画者は、史料の劣化で判然としない部分もあるが、「前国政香朝楼」とあるようである。つまりは、国貞派の絵師であった、歌川国貞（三代目）である。この双六が発行された明治二年（一八八九）に四代国政を改め、三代国貞（号・香朝楼）となっていたから、ちょうどその時期に描いたものであろう。発行者は、有力な版元であった牧金之助であり、この二人が組んで発行した錦絵双六は、ほかにもいくつか現存している。

香朝楼の描く人物は、丸みがかった太い輪郭と、やわらかな表情が特徴的である。雑とすれすれの素朴さは、今日の子供向け漫画に登場するような親しみやすさと安心感を与える、独特の庶民性に満ちているが、これらの特徴は、各マスの絵図にもはつきりと現れている。

「ふりだし」に描かれている天皇の姿に目をやれば、まず覚えるのは違和感かも知れない。憲法發布式であれ何であれ、描かれた天皇の姿といえば、端正で凛々しく、威厳を兼ね備えたものであるのが通例である。しかし香朝楼が描く天皇は、老成した猫背気味の天皇であり、どこことなく神代の天皇を思わせるところもあるが、天皇の威光という仰々しさは感じられない。文明開化の象徴であった洋装にしても、体に馴染んでいないようである。そして、式典を見守る参集者たちの顔つきも、丸顔で笑顔というごく

素朴な、まるで江戸の町人といった描かれ方をしている。

続いて、「ふりだし」から飛んで行く先のマスは、日本橋、新橋、浅草橋、といった東京（江戸）の各所である。文明開化を思わせる大アーチがあるかと思えば、侍姿の一行も描かれる。「四ツ谷狐のよめ入」、「三遊すずめおどり」といった絵図もあり、江戸と明治が混在する祭りの様子が伝わってくる。

また、三重県の風景が紛れこんだように見える二つのマスも興味深い。その一つは、「上野ステーション二見ヶ浦」である。これは伊勢・二見浦を模造品で再現したものであり、夫婦岩にはさまれて昇る、日の出の光景が再現されている。そしていま一つは、「四日市三ツ菱」とある倉庫の風景である。この四日市も東京の地名であり、「三菱の七ツ倉」として有名な、レンガ造りの倉庫を描いたものである。設計は、西郷従道^{さいこうつぎみち}邸の設計でも知られる仏人建築家、ジュール・レスカス。整然と並ぶ瀟洒な立ち姿は実に美しいが、震災により消失の運命をたどることになる。震災によって失われた明治の風景の一つであるが、これを後世に伝えることが明治文化研究会の活動目的の一つでもあった。

最後に、見れば見るほど、面白さがにじみ出てくるマスを紹介しよう。それは「田原町大象」との注釈が付けられた絵図である。マスの過半を占める象が天高く伸び上がると、ダルマや傘、魚までが、花火のごとく、鮮やかな色彩を帯びて打ち上げられていく。よく見れば、その象の足下を、すり抜けるようにして進んでいく、一台の馬車が目に入る。この大雑把に描かれた馬車に乗っていた

のは明治天皇である。マスのタイトルは「上野御臨幸」であるが、「御臨幸」しているのは、いったい象なのか天皇なのか。だが、一つの風景となった馬車の姿は、祭典に満ちる活気と、よく調和していることも確かである。

なるほど、ベルツが評した通り、祭典を楽しむ「東京市民」たちは、憲法の中味を熟知していなかっただろう。だがむしろ注目に値するのは、祭りの中に政治を呑み込んでしまう、江戸町人文化の懐の深さである。今や東京市民となった江戸町人たちの、「一身にして二生」であれ、やはり一身であつたに相違ない生命の躍動が、この双六にはよく描かれている。

— MEMO —

東京大学大学院法学政治学研究科附属 近代日本法政史料センター・明治新聞雑誌文庫

東京都文京区本郷7-1-1 東京大学内

Tel. 03-5841-1317

開室時間（新聞雑誌部）月曜日～金曜日

午前9時～午後4時半

ホームページ <http://www.j.u-tokyo.ac.jp/lib/meiji/>

・東京大学構内史料編纂所建物 地階

（赤門を入って左へ約10m、半地下）

・掲示板の裏手に見える外階段、または、史料編纂所の入り口右側にある外階段を降りてください

書評・紹介一覧 3～5月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
日光東照宮の成立 (評)日本歴史 第743号(曾根原理)	京都 芸能と民俗の文化史 (紹)歴史読本 第55巻3号	
茶の医業史 (評)日本歴史 第744号(柗津宗伸)	(紹)京都部落問題研究資料センター通信 第19号(村上紀夫)	
漱石と世界文学 (評)比較文学 第52巻(佐藤裕子)	革新の書人 河東碧梧桐 (紹)月刊美術 第414号 (紹)墨 第203号	
神社継承の制度史 (紹)史学雑誌 第119編第3号(鍛代敏雄)	平安京とその時代 (評)毎日新聞 3/28(太田裕之) (記)京都新聞 4/19(河村亮)	
九州の蘭学 (評)日蘭学会会誌 第57号(加藤榮一) (評)『洋学史研究』第27号(濱口裕介)	西村茂樹研究 (紹)弘道 第1065号(土田健次郎)	
風俗絵画の文化学 (評)日本文学 第59号(鈴木淳)	中国語圏における厨川白村現象 (評)文訊 第294号(下村作次郎) (評)週刊読書人 4/23(北岡正子)	
緒方洪庵 (紹)日本医学雑誌 第56巻第1号(芝哲夫)	北垣国道日記「塵海」 (紹)えとす 第223号 (記)京都新聞(夕刊) 4/23(中塩路良平)	
東アジアのなかの日本 (評)社叢学研究 第8号(千田稔)	明治期における不敬事件の研究 (紹)朝日新聞 4/18	
原三溪翁伝 (紹)読売新聞(神奈川版) 4/15	江月宗玩 欠伸稿訳注 坤 (紹)中外日報 5/22	

3月から5月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
明治期における不敬事件の研究	小股憲明著	1501-0 C3031	13,650	3
知の伝達メディアの歴史研究	辻本雅史編	1500-3 C3037	5,985	3
韓国「併合」前後の教育政策と日本	本間千景著	1510-2 C3021	5,880	3
応用美術思想導入導入の歴史	天貝義教著	1505-8 C3070	7,875	3
武士と騎士	小島道裕編	1507-2 C3020	9,450	3
ジャポニズム入門(2刷)	ジャポニズム学会編	1053-9 C1070	2,940	4
国際デザイン史(4刷)	デザイン史フォーラム編	1079-2 C1013	3,450	4
みやこの近代(2刷)	丸山宏・伊従勉・高木博志編	1378-8 C1021	2,730	4
江月宗玩 欠伸稿訳注 坤	芳澤勝弘編著	1515-7 C3015	9,975	4
太子信仰と天神信仰	武田佐知子編	1473-0 C3014	6,825	5
京都の都市共同体と権力	仁木宏著	1518-8 C3021	6,615	5
奈良朝人物列伝	林陸朗著	1517-1 C3021	7,350	5

3月から5月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本 回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
増補改訂 西村茂樹全集	10	10	論説 1	1504-1 C3312	17,325	3
金鍼叢書	36	36		1511-9 C3370	9,450	3
御堂関白記全註釈	8	第2期第8巻	御堂御記抄 長徳4年～長保2年	1513-3 C3321	5,250	3
技術と文明	31	16巻2号		1512-6 C3340	2,100	3
大手前大学比較文化研究叢書	6	6	1920年代東アジアの文化交流	1508-9 C3090	2,940	4
花園院宸記	19	27		1521-8 C3321	378,000	5

(表示価格は税5%込)

▼学会出店のピークが過ぎました。小社のブースにお立ち寄り頂きありがとうございます。学会は、研究者の先生方と直にお会いできる貴重な機会であることはもちろんのこと、手が空いた時には研究報告をお聞きし、最新の研究動向をチェックしております。優れた研究を広く世間に知らせることが、学術書出版社の使命と信じ、少しでもそのお手伝いできればと思います。(I)

☆二〇一〇年度刊行図書目録ができました。ご希望の方はお電話、ファックス、またはメール(いずれも下記に記載)で、ご連絡下さい。

☆ホームページリニューアルしました。思文閣グループ全体のホームページをリニューアルしました。より見やすく、よりわかりやすくなりました。

<http://www.shibunkaku.co.jp/>

☆ツイッターを始めました。

思文閣出版新刊部の、新刊情報やフェア情報などタイムリーな情報を発信しています。

左記のアドレスからご覧いただけます。

<http://twitter.com/shibunkaku>

▼数時間待ちの行列はざらな平成館を横に見る場所に、東京国立博物館の資料館はあります。専任研究員がいらないとは、ショッキングな話でしたが、収蔵資料の情報発信・公開のとりくみを日々されています。詳しくは<http://webopac.nm.jp/>をどうぞ。(h)

▼先日九州に帰省し、地元の山に癒されました。よくよく見ると、植物の緑には実に様々な種類があることに気づきます。刊行したての矢内先生のご著書は、爽やかな若草色。堺市の木・柳の新芽の色だそうです。(須)

▼梅雨の晴れ間に伊勢神宮へ。参拝者は年々増え、今年は統計上最多の八五九万人(一八九六年)を越える勢いとか。そろそろ空からお札が降ってきそうです。現代版「ええじゃないか」で平成のご一新、なるか。(大)

▼もうすぐ祇園祭。四条通に鉾や山車が出る。と街は熱気に包まれます。そして私が使うバス停は撤去され、私は少し困ります。(M)

▼基本図書の注文を受けると、若手研究者の奮起と勝手に思いめぐらしておりますが、そんな機会が増えている気がします。微力ながら奮起しなければと思う次第です。(江)

▼表紙図版…「近衛天皇陵(成功図)」(部分、鶴沢探真画「山陵図」(独)国立公文書館内閣文庫所蔵)「歴史のなかの天皇陵」より

定期購読のご案内

『鴨東通信』は年4回(3・6・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうふうしん

鴨東通信 四季報 No.78

2010(平成22)年6月30日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒606-8203

京都市左京区田中関田町2-7

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

<http://www.shibunkaku.co.jp>

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

奈良朝人物列伝

『続日本紀』薨卒伝の検討
林陸朗著

『続日本紀』には王臣・僧侶等の死没記事のあとに、その人の略伝的な記事を掲げることがある。これを薨卒伝（こうしゅつでん）といい、撰者の批評的記事を交えた極めて特色ある史料として注目される。本書は『続日本紀』収録の全54名の薨卒伝をとりあげ現代語訳・訓読・原文・語句解説・考察で構成。特色ある54人の生きざまから、権謀すまぐ奈良朝政治のうら側が見えてくる。



▼A5判・四六八頁／定価七、三五〇円

平安京とその時代

臈谷壽・山中章編

平安朝の研究を牽引してきた臈谷壽先生を中心に、京都に所縁のある研究者が、「平安京」をテーマに、歴史学・考古学・地理学それぞれの視点から意欲的なアプローチを展開した、総合論集。



▼A5判・四八八頁／定価九、四五〇円

御堂関白記全註釈

山中裕編

〔第2期・全8冊〕

待望の
完結



本全註釈は永年にわたる講読会（東京・京都）と夏期の集中講座による成果を集成。原文・読み下しと詳細な註により構成。

- | | | |
|-------|------|-----------|
| 第1回配本 | 長和4年 | 定価六、三〇〇円 |
| 第2回配本 | 寛弘3年 | 定価五、七七五円 |
| 第3回配本 | 寛弘7年 | 定価五、七七五円 |
| 第4回配本 | 寛弘4年 | 定価五、七五五円 |
| 第5回配本 | 寛弘8年 | 定価六、八二五円 |
| 第6回配本 | 寛弘5年 | 定価五、二五〇円 |
| 第7回配本 | 長和5年 | 定価一一、〇七五円 |

【最終回配本】

御堂御記抄
長徳4年〜長保2年

▼A5判・二〇四頁／定価五、二五〇円

文人世界の光芒と古都奈良

大和の生き字引・水木要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

近代奈良において個人により形成され、多様な史料の「かたまり」である水木コレクションを主な分析の素材とし、日本史学・考古学・建築史学・国文学・美術史学・地理学・社会言語学等にわたる学際的な一書。



▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円

東京国立博物館古典籍叢刊

九条家本延喜式 (全五卷)

第一回配本 (一) 卷一・二・四・六・七甲・七乙 [九月下旬刊行]

▼A5判・四六〇頁／定価一五、七五〇円

本書の特色

- ・東京国立博物館所蔵の国宝・九条家本延喜式を、紙背文書も含めて写真版で影印出版
- ・FMスクリーンによる高精細印刷。朱書きがある箇所は二色刷とした
- ・紙背文書には新撮の高精細画像を使用
- ・第五回配本に九条家本延喜式の解説と紙背文書全点の翻刻を付す
- ・写真版に延喜式の条文番号を示した
- ・紙背は横長で掲載し、できるだけ一文書を一頁でみるようにトリミングを工夫した

続刊 平均五〇〇頁・予価(各)一五、七五〇円

- (二) 卷八(十一) 平成二二年二月刊行
- (三) 卷十二・十三・十五・十六・二十(二十二) 平成二三年三月刊行
- (四) 卷二十六(三十一) 平成二三年六月刊行
- (五) 卷三十二・三十六・三十八・三十九・四十二 平成二三年九月刊行

東京国立博物館古典籍叢刊 続刊予定

〔次回〕元暦校本万葉集 刊行時期未定

編集委員

- 島谷弘幸(編集委員長・東京国立博物館)
- 高橋裕次(東京国立博物館)
- 田良島哲(東京国立博物館)
- 富坂賢(東京国立博物館)
- 田島公(東京大学史料編纂所)
- 月本雅幸(東京大学人文社会系研究科)
- 吉岡眞之(東京大学史料編纂所)

安祥寺資財帳

京都大学史料叢書一七

京都大学文学部日本史研究室編／中町美香子・鎌田元一編集解説
巻首から巻尾まで備わった貴重な九世紀の資財帳史料の一つ、安祥寺資財帳。現存の諸本の祖にあたる京都大学蔵本（旧観智院蔵本）を影印（写真版）収録。釈文と解説を付す。京都大学史料叢書最新刊。

〔七月下旬刊行予定〕

▼A5判・二〇四頁／定価五、七七五円

京都大学史料叢書

京都大学文学部日本史研究室編

京都大学日本史研究室および京都大学附属図書館所蔵の古文書古記録のうち、古代から近代まで各時代にとって史料の価値の高い史料群を、活字あるいは影印にて刊行。年一回刊行予定。※書目を追加しました

〔既刊九冊〕

兵範記（一）～（三）

兵範記（四）・範圍記・知信記

兵範記紙背文書（全一冊）

古文書集西山地蔵院（全一冊）

京都雑色記録（一）～（二）

京都雑色記録（三）

吉田清成関係文書（一）～（三）書翰篇1～3

吉田清成関係文書（四）書翰篇4

吉田清成関係文書（五）書翰篇5

吉田清成関係文書（六・七）書類篇1・2

安祥寺資財帳（全一冊）

大記（全一冊）

永昌記（全一冊）

東大寺文書（全一冊）

晴豊公記・晴右公記（全一冊）

光豊公記（全一冊）

田中不二麿文書（全一冊）

▼A5判・平均四〇〇頁

禁裏・公家文庫研究

〔既刊三冊〕

田島公編

勅封のため全容が不明であった東山御文庫本を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズ。

▼第一輯

B5判・三九〇頁／定価一〇、二九〇円

第二輯

B5判・四〇六頁／定価一〇、二九〇円

第三輯

B5判・四九六頁／定価一二、三九〇円

正倉院宝物に学ぶ

奈良国立博物館編

日々、宝物の保存と修理に携わる宮内庁正倉院事務所の研究者をはじめ、東大寺・奈良国立博物館ゆかりの国内外の研究者が、正倉院研究の現在、八世紀の東アジア文化、宝物の保存・伝承の3つのテーマで報告・討論。正倉院宝物の精粹がわかる一書。

▼四六判・四三八頁／定価三、一五〇円



日本古代都市史研究

古代王権の展開と変容

堀内明博著

永年、平安京などの都市遺跡発掘調査に携わった著者の研究成果。王朝都市から中世前期都市まで、都城の展開と変容過程を時系列的に分析し、古代王権のあり方を考古学の成果を踏まえて解明した一書。掲載図版多数。

▼B5判・五一四頁／定価一五、七五〇円

太子信仰と

天神信仰

武田佐知子編

信仰と表現の位相

時代を超えて、上下を通じた諸階層の篤い崇敬を得てきた、聖徳太子信仰・天神信仰の比較研究。各専門分野の研究者による、両信仰に関わる美術史的、文学史的、宗教史、芸能史的研究を集成し、時代のニーズとともに変化する信仰の形態や、それに付随するイメージの付与、そして宗派や地域を越えて多面的に利用されるそれぞれの信仰の進化について明かす。



▼A5判・三四四頁／定価六、八二五円

総論 (武田佐知子)

第一部 室町時代の紀行文に見る天神信仰・太子信仰 (鶴崎裕雄) 太子信仰と天神信仰 (高島幸次) 江戸時代の天神信仰・太子信仰と城下町金沢の文化 (濱岡伸也)

第二部 聖徳太子伝の史料の性格 (下鶴隆) 拡散する聖徳太子伝承 (松本真輔) 唐本御影の伝来過程をめぐって (伊藤純) 地誌としての寛文刊本『聖徳太子伝記』 (榎原小葉子)

第三部 菅原道真の仏教的言説とその継承 (稲城正巳) 北野聖廟和歌・連歌とその功德 (脇田晴子) 正面向きで直立する異色の束帯天神画像について (松浦清) 菅生天満宮所蔵・掛軸形式の天神縁起絵について (鈴木幸人) 越前国敦賀郡の天神信仰・序説 (竹居明男)

一休派の結衆と史的展開の研究

矢内一磨著

一休没後も存続した一休派の結衆とその史的展開を解明。

【内容】

第一部 評議と祖師忌法会にみる一休派の結衆とその史的展開

一休派における評議体制の成立と展開／祖師十三回忌、三十三回忌大法会と一休派の結衆形態／祖師百回忌大法会と一休派の結衆形態／近世の祖師忌大法会と一休派の結衆形態／近世における酬恩庵慈楊塔の祖師忌法会と一休派の結衆形態／五山禅林の詩会と禅僧の結衆

第二部 一休派における僧俗の結衆とその史的展開

文明年間の大徳寺復興と一休派／在俗信仰者の教団結衆／尼・女性信者の結衆／泉南仏国論／文明年間の大徳寺と堺町衆に関する新史料について

【最新刊】

▼A5判・三七二頁／定価八、一九〇円
やない かずま：一九六四年兵庫県生まれ。同志社大学大学院文学研究科文化史学専攻博士後期課程研究指導修了。現在、堺市博物館学芸員。

せいざん

西山浄土教の基盤と展開

五十嵐隆幸著

日本浄土教の祖師や、法然の浄土教義、さらに門弟の證空や行観を中心に西山教義をまとめる。「旧仏教・新仏教」といった対立構造ではなく、浄土教義を軸に日本文化を継承創造する仏道として、日本仏教の姿を構成する試み。

【7月刊行予定】

▼A5判・三〇〇頁／定価四、二〇〇円
いがらし たかゆき：一九六三年京都市生まれ。龍谷大学大学院仏教学科博士後期課程単位取得後退学。現在、養福寺住職、禅林宗学院講師。

風俗絵画の文化学

松本郁代・出光佐千子編

都市をつつすメディア

中世から近世の風俗絵画のメディア性に着目し、多岐分野の専攻者が様々な視点からアプローチする。
▼A5判・三六八頁／定価六、八二五円

京都の都市共同体と

権力

思文閣史学叢書

仁木宏著

中世京都の都市構造モデルを前提に、その変容のなから町の成立を読み解く。自力救済社会における武家と都市民の対峙が、やがて公儀を創出し、都市共同体を確立させることを明らかにする。中近世移行期における自治、共同体、権力の葛藤を正面から見すえ、都市の本質を具体的、理論的に分析した一書。

▼A5判・三三三頁／

定価六、六一五円

京都 芸能と民俗の文化史

山路興造著

芸能史研究の第一人者が、祇園御霊会や大念仏狂言、六斎念仏、賀茂社の御戸代神事、盆踊りなど京都の芸能民俗史の歴史の実態を、資料のなかで検討しな

▼A5判・三三八頁／定価七、八七五円



序論 中世都市研究と京都

第一部 室町・戦国時代の都市社会

中世後期の都市構造

自力救済社会と都市の「平和」
人的ネットワークの展開

第二部 都市共同体と公儀

都市共同体の確立と展開
都市共同体の発展と室町幕府

三好・織田政権の都市支配論
豊臣政権の「政道」と都市共同体
惣町・町組の形成過程

をめぐって

第三部 「首都」としての京都

都市構造の変容

都市の惣構と「御土居」

結語 京都研究と中近世移行論

にきひろし：一九六二年大阪府生。京都大学大学院文学研究科博士後課程修了。大阪市立大学大学院文学研究科教授。京都大学博士（文学）。

中世京都の空間構造と

礼節体系

桃崎有一郎著

貴人と牛車ですれ違う場合の正しい作法は？参内するときはどこで牛車を降りればよいのか？

中世の京都で実践された礼節体系の考察を通じて、中世京都の空間構造を明らかにし、室町殿権力の形成・展開過程をも論ずる。



第一章 中世公家社会における路頭礼秩序

——成立・沿革・所作——

第二章 中世武家社会の路頭礼・乗物と公武の身分秩序

第三章 中世洛中における街路通行者と第宅居住者の礼節的関係

——門前・第宅四面と広義の路頭礼——

第四章 中世里内裏の空間構造と「陣」

——「陣」の多義性と「陣中」の範囲——

第五章 中世里内裏陣中の構造と空間的性質

——公家社会の意識と「宮中」の治安——

第六章 中世における朝儀出仕と里内裏周辺空間秩序

——陣中・陣家・外直廬と乗車忌避——

第七章 陣家出仕の盛行と南北朝・室町朝儀体系の略儀化

——公家社会の経済的窮乏と室町殿権力の朝廷支配——

第八章 「裏築地」に見る室町期公家社会の身分秩序

——治天・室町殿と名家の消長——

第九章 中世後期身分秩序における天皇と上皇・室町殿

——身分尺度としての陣中・洛中の分析から——

第十章 裏築地の起源・沿革・終焉と中世の里内裏

——内裏・院御所・京都論の動向と陣中・裏築地論の論点——

▼A5判・五八四頁／定価七、五六〇円

桃崎有一郎著。一九七八年東京都生。慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程修了。立命館大学文学部京都学プログラム講師。博士（史学）。

武士と騎士 日欧比較中近世史の研究

小島道裕編



人間文化研究機構連携研究「武士関係資料の総合化」の一環として、日仏で行われた国際シンポジウムの成果。具体的な資料に基づき、多様な視点から武士と騎士をとりあげた19本。

I 領主と武力

城と領主権
西欧中世における貴族・騎士と封建制
中世ヨーロッパにおける騎士と弓矢
日欧甲冑比較論序説
出陣図屏風に描かれた近世軍制

エリック・ブルナゼル(パリ第2大学)
渡辺節夫(青山学院大学)
堀越宏一(東洋大学)
近藤好和(國學院大学ほか非常勤講師)
笠谷和比古(国際日本文化研究センター)

II 城の形と機能

中世における城
アンヌ・マリ・フランバール・エリシエ(元ルーアン大学)
中世西欧地中海沿岸地方の農村部における城と定住
エチエンヌ・ユベール(国立社会科学高等研究院)
日本中世における城と領主権力の二面性
井原今朝男(国立歴史民俗博物館)
千田嘉博(奈良大学)

III 資料とイメージ

城における領主を描いた中世の図像
ペリヌ・マヌ(国立科学研究センター CNRS)
洛中洛外図屏風と描かれた公武関係
頼朝のイメージと徳川将軍
日本中世における「武家文書」の確立過程とその諸相
中・近世武家書札礼の文化史
マルクス・リュッターマン(国際日本文化研究センター)

IV 理念と言説

近世武家の年中儀礼と言説
旧幕臣と武士道
「武士道」研究の現在
資源化される歴史
中世を比較する
ミシエル・コラルデル(元ヨーロッパ地中海文明博物館)
ビエール・スイリ(ジュネーブ大学)
大友一雄(国文学研究資料館)
岩淵令治(国立歴史民俗博物館)
佐伯真一(青山学院大学)
新谷尚紀(国立歴史民俗博物館)

おわりに

広瀬旭莊全集 詩文篇 (全1冊)

岡村繁・井上敏幸編

【7月刊行予定】

既刊 日記篇(全9冊)・随筆篇(全1冊) 揃定価一四九、一〇〇円

▼B5判・八六二頁/定価三二、五〇〇円

徳川將軍家領知宛行制の研究

藤井讓治著

領知朱印状に注目し、徳川將軍家の領知宛行制の形成過程とその特質を明らかにする。

思文閣史学叢書

▼A5判・四一二頁/定価七、八七五円

伝統産業の成立と発展

桑田優著

播州三木金物の事例

兵庫県三木市の伝統産業、三木金物は近世後期に勃興し、現在にいたっている。本書は、三木金物が特産品として全国市場へ進出してゆく過程を、流通機構の発達など社会的な背景にも着目しつつ跡づける通史。

◇内容◇

発刊に寄せて（冷泉為人）

第一部 三木金物の成立と発展

- 1 近世後期における在郷町の変貌
- 2 近世三木町における前挽鋸鍛冶仲間の成立と発達
- 3 近世後期における三木金物と大坂・江戸市場
- 4 金物仲買問屋と鍛冶職人
- 5 第二次世界大戦前における伝統産業の発展と同業組合
- 6 第二次世界大戦後における伝統産業の発展と同業組合

第二部 地場産業勃興と社会文化の発達

- 1 上州館林藩越智松平氏と飛び地領支配
- 2 播州三木町の切手会所
- 3 近世における加古川の舟運
- 4 三木町金物仲買問屋の経営

終章 江戸時代における情報の発達と文化交流

くわた・まさる：一九四五年神戸市生。関西学院大学大学院文学研究科博士課程単位取得。元神戸国際大学経済学部教授。

【7月刊行予定】

▼A5判・三〇〇頁／定価六、八二五円

三木金物問屋史料

永島福太郎編

三木金物仲買問屋「作清」黒田清右衛門家の近世史料を主体に、仲買問屋「道善」井上善七家、三木市宝蔵文書・市立図書館所蔵文書から金物関係史料を収録。解説と研究5篇を付した。

▼A5判・七〇〇頁／定価一〇、五〇〇円

大阪経済大学日本経済史研究所研究叢書

東アジア経済史研究 第1集

中国・韓国・日本・琉球の交流
大阪経済大学日本経済史研究所編

▼A5判・三四四頁／定価四、二〇〇円

住友史料叢書

〔既刊24冊・第五期刊行中〕

小葉田淳・朝尾直弘監修／住友史料館編集

▼A5判・平均四〇〇頁・定価各七、八七五〜一一、〇二五円
《最新第24回配本・銅座方要用控二 定価九、九七五円》

青島の都市形成史：1897-1945

樂玉璽著

市場経済の形成と展開

青島がドイツ・日本との間に持った経済関係や、その歴史的要因、青島の経済発展の過程や特徴、さらに青島が全中国へ与えた影響を解明。

▼A5判・三六四頁／定価七、一四〇円

原三溪翁伝

藤本實也著／三溪園保勝会・横浜市芸術文化振興財団編

原三溪は、生糸貿易や製糸業で活躍した横浜の事業家。本書は藤本實也が戦時中にとまとめた幻の原稿『原三溪翁伝』を、横浜開港一五〇周年を記念して、校訂のうえ刊行。

▼A5判・九三六頁／定価一六、八〇〇円

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編

日本の産業技術史研究を23の大項目に分け、関連項目を三四四の小項目としてとりあげる。

▼B5判・五五〇頁／定価一二、六〇〇円

知の伝達メディアの歴史研究

辻本雅史編

教育史像の再構築

「教育」を「知の伝達」ととらえ直し、その伝達のための媒体を「メディア」と規定することで、学校を中心とした教育史像ではなく、学校を含みながらも、学校を越えたところで見られる人間形成の営みを、捉え直す視点を提示。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、九八五円

北垣国道日記「塵海」

塵海研究会編

京都府知事・北海道庁長官などを歴任した北垣国道は様々な活動や多くの人々との交流を、自ら「塵海」と名付けた日記に書き残した。本書は15年間の塵海研究会の翻刻成果をまとめたものであり、明治期地方官の実情を記した第一級資料である。

▼A5判・六四〇頁／定価一〇、二九〇円

明治期における不敬事件の研究

小股憲明著

これまで体系的な研究がされてこなかった不敬事件を、明治期について網羅。天皇制と教育の関係、天皇制と近代日本および国民の関係を考察する大著。資料編として、二二八事例と二三参考事例の概要および参考文献を収載。

▼B5判・五七六頁／定価一三、六五〇円

みやこの近代

丸山宏・伊從勉・高木博志編

「近代の歴史都市としての京都」についての基本的な諸問題を多角的に論じようと開かれた京都大学人文科学研究所「近代京都研究会」。そこで論じられたさまざまな分野の具体的な主題をもとに、近代現代の京都の根本問題を見通す視座を形成しようとする試みの85篇。図版多数。

「2刷出来」

▼A5判・二六八頁／定価二、七三〇円

西村茂樹研究

真辺将之著

明治啓蒙思想と国民道徳論

明治の啓蒙思想家・道徳運動家である西村茂樹の思想について、従来の「保守」と「進歩」という二項対立的な枠組みから脱却し、時代状況に応じた問題意識の変遷と主張の展開を、史料に基づいて跡づけることにより明らかにする。

▼A5判・四八八頁／定価八、一九〇円

応用美術思想導入の歴史

天貝義教著

ウィーン博参同より意匠条例制定まで

ウィーン万国博覧会への日本初参加から、意匠条例が制定されるまで、応用美術思想がいかに学習され、明治期の美術・工芸界において指導的役割を果たしたかを明らかにする。

▼A5判・四一〇頁／定価七、八七五円

韓国「併合」前後の教育政策と日本

本間千景著

佛教大学研究叢書8

第二次日韓協約から第一次朝鮮教育令発布後の期間を対象とし、当該期の修身教科書への影響や教員の養成・日本人教員の配置など、現地における学校教育をとりあつかう。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、八八〇円

象徴天皇制の形成と定着

富永望著

「象徴天皇（制）」という言葉に着目して、この用語の使用法を検証し、さらに吉田茂の憲法運用と、それに異を唱える政治勢力や憲法学者の天皇観を明らかにする。象徴天皇制は新憲法の運用の積み重ねによって形成されたことを実証する鋭鋭の書。

▼A5判・三一六頁／定価五、〇四〇円

言語のあいだを読む 日・英・韓の比較文学

大澤吉博著

【最新刊】

東京大学大学院で比較文学の指導に当たり、在職中に急逝した氏の研究成果。その主題は夏目漱石、漱石を中心とした日本文学、文学の他言語への翻訳、外から見た日本文学と日本文化、そしてイギリスと世界との関わりである。三〇年以上にわたる多彩な研究の全体を広く学界に提示する遺稿集。

▼A5判・五五二頁／定価九、四五〇円

I 比較研究の将来

比較文学研究と翻訳

共通言語・支配言語と比較文学

言語芸術と非言語芸術

II 夏目漱石『心』における非日常性

対話から独白へ―複式夢幻能としての『心』―

III 日本近代文学における告白

夏目金之助訳「セルマの歌・カリックスウラの詩」―「旧派の文学」―

IV 「新しい女」の衝撃

「夢十夜」の音声性とその翻訳可能性

V 言語の間の漱石

日本語・英語・韓国語テキストを比較して

VI 現代日本文学英訳におけるテキスト操作

吉本ばなな『キッチン』英訳を例として

VII 文化の根について

「ハワース・エント」と「インドへの道」

VIII 自立という脅迫

「ロレンス『息子と恋人』とフォースター『モリス』を論じて

IX 多言語状況を生きた作家

タゴールとクギ・ワ・ジョンゴを論じて

X タゴールのナショナルリズム批判

第一回来日（一九一六）をめぐる

XI 語るべき（自分）とは何か

「開国」の社会心理学―ペリ、ゴンチャロフ、オールコック比較

XII 「開国」の社会心理学

日本人は猿に見えるか

XIII 日本女性の不可解性と理想化

『お菊さん』と『蝶々夫人』

XIV 「心中天の網島」

遊女の誇り

XV 伝統を夢みる「私」

近松秋江『黒髪』の分析

XVI 近現代日本の文字図像

テクストに描かれた婿養子―織田作之助「家風」―

XVII 谷崎潤一郎『細雪』

長谷川町子「サザエさん」

中国語圏における厨川白村

現象 ― 隆盛・衰退・回帰と継続 ―

工藤貴正著

厨川白村を軸とした日中台の文学交流史。

▼A5判・三八〇頁／定価六、三〇〇円

一九二〇年代東アジアの文化交流

大手中前大学比較文化研究叢書6

川本皓嗣・上垣外憲 一編

近代東アジア文化交流の様相を明らかにする。

▼A5判・二三〇頁／定価二、九四〇円

漱石文学の水脈

坂元昌樹・田中雄次 編

西槇倬・福澤清

漱石ゆかりの熊本大学教員を中心とした共同研究成果第二弾

▼四六判・二二六〇頁／定価二、九四〇円

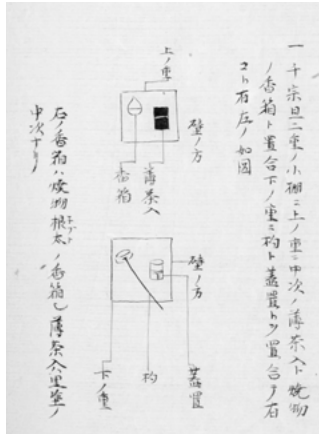
茶譜 全2冊

茶湯古典叢書5

谷晃・矢ヶ崎善太郎 共編

【八月刊行予定】

近世茶書としては最も大部にして体系的なものの一つである茶譜(全十八冊)は、利休・織部・遠州・宗和・宗旦のそれぞれ茶匠とその時代の茶の湯を、確かな情報に基づいて茶の湯の分野ごとに再編集したものである。西尾市岩瀬文庫蔵本を底本とし、現存する諸本と校合して全編活字化。挿図についても別冊の写真版で全て収録。



▼A5判／図版篇七五〇頁・本文篇一七〇頁

定価二二、〇〇〇円

たにあきら……野村美術館学芸部長
やがさぎぜんたろう……京都工芸繊維大学大学院工学研究科准教授

古田織部茶書 (全2冊) 茶湯古典叢書2・3

市野千鶴子校訂

利休の高弟・七哲の一人で織部流茶道の開祖、古田織部の茶道秘書を集成。

▼A5判・総八〇〇頁／揃定価一五、一二〇円

金森宗和茶書 茶湯古典叢書4

谷晃編

底本には金沢市立図書館蔵本文庫所蔵の『茶道の書本』を用いた。

▼A5判・四九〇頁／定価二三、一二五円

江月宗玩 欠伸稿訳注 (乾坤・全2冊)

芳澤勝弘編著

江月宗玩の語録、龍光院蔵自筆本を翻刻。近世文化人の消息を窺う貴重資料。

▼A5判・総一四一四頁／揃定価一九、九五〇円

尾陽 (既刊6冊) 徳川美術館論集

徳川美術館編

徳川黎明会編の『金鯱叢書』収録分から徳川美術館分を独立させて刊行。

▼B5判・総一一四〇頁／定価(各)三、一五〇円

藤村庸軒年譜考 (全2冊)

白奇顕成著

庸軒の生涯の動向を、文献学的方法にもとづいて明かした異色の年譜考。

▼A5判・総一八四八頁／定価三六、七五〇円

茶の湯文化と小林一三

逸翁美術館編

逸翁美術館の新装オープンを記念して開催された特別展「茶人逸翁——茶の湯文化と小林一三——」（二〇〇九年）の展覧会図録。

▼A4判・一四八頁／定価二、〇〇〇円

近代茶道の歴史社会学

田中秀隆著

茶道が日本の「伝統文化」として認知されるようになった過程を考察する。

▼A5判・四五四頁／定価六、八二五円

茶道と恋の関係史

岩井茂樹著

「恋は茶道の精神に反する」——谷崎潤一郎の随筆にある興味深い一節をきっかけに、恋歌と茶道の関係を茶書や茶会記に探る。

▼A5判・二三二頁／定価三、九九〇円

武野紹鷗

わびの創造

戸田勝久先生喜寿記念論集刊行会編

▼A5判・六一四頁／定価二二、六〇〇円

茶の湯 連翹抄

戸田勝久著

裏千家今日庵三代目業株、教授者（茶名宗安）の著者が、永年にわたり従事してきた茶の湯研究の集大成。

▼A5判・六〇四頁／定価七、九八〇円

隔莫記

全7巻

（本篇6巻 総索引1巻）

本篇・赤松俊秀校訂／総索引…『隔莫記』研究会編

金閣鹿苑寺住持鳳林承章自筆の日記『隔莫記』を活字化。その記述は鳳林43歳の寛永12年（寛文8年）までの33年にわたる。近世文化描寫期の社会相を知る最重要史料。

▼A5判・総五一三〇頁／定価七三、五〇〇円

隔莫記 総索引

『隔莫記』研究会編

『隔莫記』本篇全6巻の膨大な情報を整理した索引。人名・事項・社寺名・地名の4分類。

▼A5判・七六〇頁／定価一四、七〇〇円

織豊期の茶会と政治

竹本千鶴著

織田・豊臣政権における支配構造の側面を茶会の場を通して明らかにする。

▼A5判・四九四頁／定価七、八七五円

公家茶道の研究

谷端昭夫著

近世における「公家茶道」の形態・特徴・茶道史における位置を考察。茶が持つ文化の内実を深める。

▼A5判・三九四頁／定価六、八二五円

茶の医薬史

中国と日本

岩間眞知子著

もともと茶は薬であった。中国と日本の医薬書史料の影印を多数収録し、それらの史料から中国・日本の各時代における茶の様相とその歴史の変遷を明らかにする。

▼A5判・五二四頁／定価九、四五〇円

【好評2刷】

小児科学の史的変遷

深瀬泰旦著

〔7月刊行予定〕

昭和36（1961）年より小児科開業医として永く地域医療に携わってきた著者が、内外の医学書原著をひもとき、小児科学の誕生や発展の跡をたどる。小児科医が減少の一途をたどり、高齢化が進む現況、著者が一小児科医の使命として、小児科学史への注目を喚起した一冊。

▼A5判・六〇四頁／定価九、四五〇円

I 感染症の変遷

コブシク班の原著をたずねて／ヘンリー・コプリックが百日咳患者から分離した桿菌／麻疹予防接種の先駆者 Francis Home／仮性小児コレラ／明治12年沖縄県のコレラ流行と土屋寛信／疫病／消えた感染症／ジェンナーの「牛痘」の原因および作用に関する研究』をよむ／わが国における熱性けいれんの歴史

II 歴史的な小児科書をよむ

ニルス・ローゼン・フォン・ローゼンシュタイン著『小児科学の知識と治療の指針』／マイケル・アンダーウッド著『小児疾病論』／カール・ウンデルリッヒ著『疾病における固有の体温の様相』／ハーヴェイの血液循環論とその受容

III 疾病概念の変遷

先天代謝異常症の概念の歴史／Archibald Garrodのパラダイム／背番号病／文学作品に由来する2、3の病名／発疹性感染症にみる病名の由来／新生児黄疸と体質性黄疸

IV 小児病の診断と治療

シャール・ロック・ホームズのモデルジョゼフ・ペル教授と診断学の周辺／視尿病から科学的検尿法まで／輸液療法のあゆみ

V 小児科学の誕生と小児病院

小児科学の誕生と小児病院の歴史／人工栄養法の確立をめざして／ヒトの成長についての研究史／東と西の育児論

ふかせ・やすあき…1929年生。東京慈恵会医科大学を経て深瀬小児科医院を開業（～2008年）。2008年日本医史学会理事。2003年日本医史学会矢数（やかず）医史学賞、2004年日本医師会最高優功賞（医史学）を受賞。

天然痘根絶史

深瀬泰旦著

近代医学勃興
期の人びと

ジェンナーによって発明された牛痘接種法は、日本においてはお玉ヶ池種痘所において実践され、この技術を強力な尖兵としてお玉ヶ池種痘所は蘭学という学問を普及させる上での確固たる拠点となった。それは、日本近代医学の誕生、今日の医学・医療の興隆の礎ともいえる。天然痘の根絶を目ざす人びとに焦点をあてながら、この近代医学勃興期とも呼べる時代を活写する。

▼A5判・四五〇頁／定価八、九二五円

緒方洪庵 幕末の 医と教え

中田雅博（産経新聞文化部記者）著



幕末の医学界に大きな足跡を残した緒方洪庵が、二〇一〇年に生誕二〇〇年を迎える。開国とグローバルライゼーションの激動の時代に「医は仁術」をすすんで実践し、適塾で弟子の教育に身を捧げた洪庵の軌跡を平易かつ詳細な文章でたどる好著。

▼A5判・四〇〇頁／定価二、六二五円

江戸期文化人の死因

杉浦守邦著

日本の歴史に名を残した人々が、どのような病にかかり、どのように対処しながら一生を終えたのか。日記、書簡、肖像画など、さまざまな資料から二名の死因を読み解き、「死因」という観点から、江戸期に活躍した文化人たちの生活を浮き彫りにする意欲作。

▼A5判・三四〇頁／定価二、六二五円

九州の蘭学 越境と交流

W・ミヒル・鳥井裕美子・川島真人編

長崎及び九州各地で、人々が在来の学術とは異質な西洋近代科学にどう向き合い、西洋人がどれほど貢献したか、最新研究成果から、彼らの業績と足跡を通して明かす。



▼四六判・三八〇頁／定価二、六二五円

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



本作が描かれた明治三〇年（一八九七）は黒田が傑作を次々と生み出していた時期である。この年に開催された白馬会の第二回展には重要文化財に指定された《智・感・情》《湖畔》等、計一七点出品したというが、そのうちには本作と同題の作品の出品記録も認められる。残念ながら画像は確認できないため、本作と同一のものは断定できていない。

日記や書簡には「夜雨ハ止んでい、月夜ニ爲つた」等、月の出に関する記述も目立つ。多忙な一日の終わりに差す月の光の

◆ 江 月 ◆

黒田清輝

美しさを愛したのかもしれない。黒田と言えば《湖畔》のような明らかな太陽の光の下で描いた爽やかな作品が良く知られるが、静かに月が照らす落ち着いた風景もまた、幻想的で味わいがある。白馬会の展示においては《智・感・情》のような構成を練った構想画が話題をさらったというが、本作のような「スケッチ」的な作品にこそ、画家の自然美への素直な感動が表されている。

（思文閣本社編集部・山田理恵子）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL (075)531-0001 Fax (075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣美術館 開催中の展覧会

開館35周年記念特別展 木田安彦の世界
「富士百観とふるさとの名山」展



木田安彦 象頭山 二〇〇一年

8/1(日)まで 休館日：月曜(但し7/19は開館)・7/20
◎7/18(日)14:00～ギャラリートーク

※入館料で参加可/予約不要

木田安彦×鷺田清一 (大阪大学総長)

京都市左京区田中関田町2-7
☎(075)751-1777 Fax.(075)762-6262
<http://www.shibunkaku.co.jp/artm/>
e-mail artm@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・
古地図・錦絵などから学術書全般に至るま
で、あらゆるジャンルの商品を取り扱って
おります(年4回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部ま
でお問い合わせ下さい。



前巻
百鬼夜行之図
二巻

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 357
☎(075)752-0005 Fax.(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
e-mail kosho@shibunkaku.co.jp

思文閣会館ご使用の案内



2F フリースペース
展覧会や講演会など



3F 多目的ホール
会議や勉強会、趣味の
お稽古場、ちょっとした
お集まりなど

B1F テナント募集中

飲食店や雑貨店、
倉庫などにご利用いただけます。

京都市左京区田中関田町2-7
お問い合わせは左記思文閣美術館まで